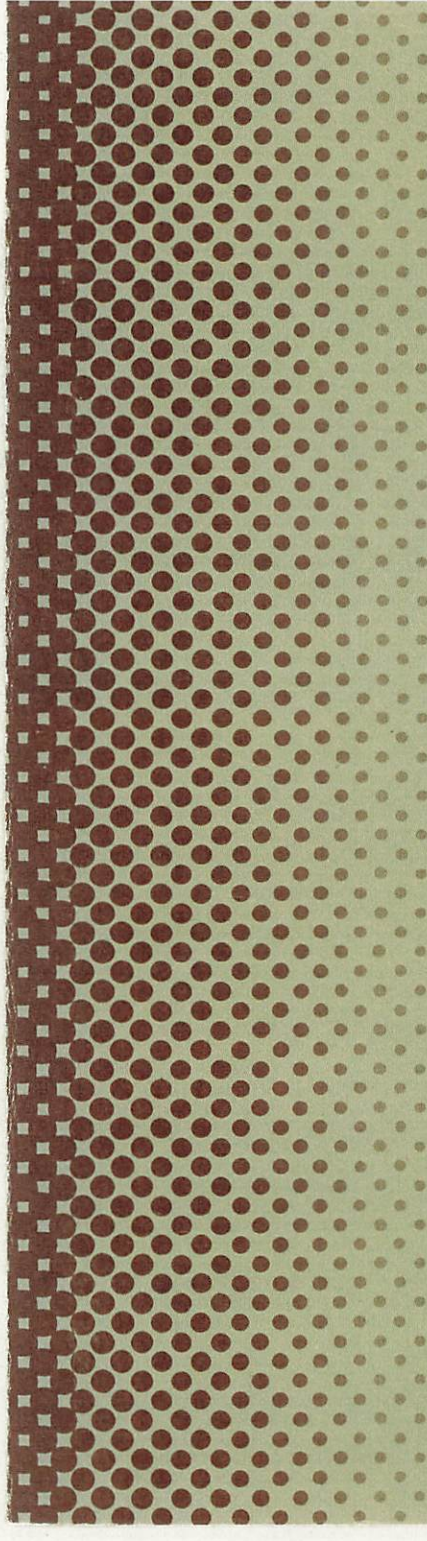




Münchener Philharmoniker

Künstlerische Leitung:
Generalmusikdirektor Sergiu Celibidache

JAPAN ● 1993



PHOTO : Werner Neumeister

ごあいさつ



GRUSSWORT

Wer heute Maestro Celibidache mit den Münchner Philharmonikern, deren Leiter und Generalmusikdirektor er seit 1979 ist, hören will, darf die Luft des Konzertsaals nicht scheuen. Der Meister verzichtet bewußt auf Tonkonserven, weil sie nur reduzierte Versionen seiner musikalischen Imagination bieten können. Wir beugen uns gerne dem Willen dieser außergewöhnlichen Künstlerpersönlichkeit, da wir nach dem triumphalen Gastspiel des letzten Jahres im Oktober erneut das Privileg genießen, die Münchner kurz vor ihrem hundertsten Geburtstag am 13. Oktober 1993 in Tokyo zu erleben.

Sie bieten uns mit Bruckners Werk die musikalische Krönung einer glanzvollen Saison deutscher klassischer Musik. Ich heiße Sie im Namen aller Kunstbegeisterten willkommen und wünsche Ihnen bestes Gelingen Ihrer Tournee.

A handwritten signature in dark ink, appearing to read 'Wilhelm Haas'.

Wilhelm Haas
Botschafter der
Bundesrepublik Deutschland

巨匠チェリビダッケ氏は、1979年以来ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の指揮者兼音楽総監督を勤めておりますが、今日、彼の率いる同管弦楽団の演奏を聞こうと思う者は、コンサートホールを嫌ってではありません。巨匠は、録音という音の缶詰が自分の音楽的イマジネーションを十分に伝えるものではないとの理由から、意識的にこれを断念しているのです。類稀なる偉大な音楽家である同巨匠のこうした意志には、喜んで従うものであります。と申しますのは、昨年10月に大成功を博した日本公演の後で、再び、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の公演を、しかも本年10月13日の創立100周年を間近に控えた時期に、東京で体験するという特権を享受できるからであります。

今回の公演では、ブルックナーの作品を取り上げますが、これはドイツ クラシック音楽の輝かしい演奏期間に於ける音楽的頂点を飾るものであります。音楽を熱狂的に愛好する全ての方々の名に於いて、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の来日を心より歓迎し、併せて、その日本公演の成功を願って止みません。

ドイツ連邦共和国大使
ヴァイルヘルム・ハース

Grußbotschaft

Die Münchner Philharmoniker wurden 1893, vor hundert Jahren also, gegründet und sind längst zu einem der bedeutendsten Klangkörper der Welt herangewachsen. Seit 1979 ist Sergiu Celibidache Generalmusikdirektor dieses Orchesters der Landeshauptstadt München. Unter seiner Ägide werden die Philharmoniker überall als musikalische Botschafter gefeiert.

Nach den erfolgreichen Japantourneen 1986 und 1990 und den zwei Konzerten, die gemeinsam mit Arturo Benedetti Michelangeli im vergangenen Oktober 1992 in Tokio innerhalb der Asientournee aufgeführt wurden, sind wir gewiß, daß Sergiu Celibidache mit seinen Philharmonikern, dieses Mal mit Werken von Bruckner, Schubert, Haydn und Tschaikowsky, das Konzertpublikum wieder zu begeistern wissen wird.

Wir freuen uns, allen Freunden und Konzertbesuchern der Philharmoniker in Japan auf diesem Wege die Grüße der Landeshauptstadt München zu übermitteln.



Georg Kronawitter
Oberbürgermeister der
Landeshauptstadt München

Siegfried Hummel
Kulturreferent der
Landeshauptstadt München



ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団はちょうど百年前の1893年に創立され、以来、同団は世界を代表するオーケストラのひとつに発展いたしました。1979年からセルジュ・チェリビダッケがこのミュンヘン市のオーケストラの音楽監督を務めております。彼の指揮のもと、同団は音楽の大使として称賛されて参りました。

1986年と1990年の日本ツアー、さらにアジア・ツアーの一環として行われた1992年10月東京でのアルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリを迎えての2回のコンサートの成功に続いて、セルジュ・チェリビダッケとミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団は今回もブルックナー、シューベルト、ハイドン、チャイコフスキーの作品で聴衆の皆様を魅了してくれることと確信いたします。

この機会に日本の友人と聴衆の皆様にミュンヘン市よりのごあいさつを申し上げることを嬉しく思います。

ミュンヘン市長
ゲオルク・クローナヴィッター

ミュンヘン市文化担当官
ジークフリート・フンメル



オランダ広場 Photo: A. Matsumoto



1990年10月東京公演より PHOTO: K. Miura (右の3点共)



ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団

Münchner Philharmoniker

セルジュ・チェリビダッケ指揮

Künstlerische Leitung: Generalmusikdirektor Sergiu Celibidache

1993年日本公演日程

日 時	都 市	会 場	主 催	プログラム
4月15日(木) 7時 Thu., April 15 at 7p.m.	東 京 TOKYO	東京文化会館 Tokyo Bunka Kaikan	財団法人都民劇場	B
4月17日(土) 7時 Sat., April 17 at 7p.m.	大 阪 OSAKA	ザ・シンフォニーホール The Symphony Hall	梶本音楽事務所 後援: 朝日放送	D
4月18日(日) 6時 Sun., April 18 at 6p.m.	名古屋 NAGOYA	愛知県芸術劇場コンサートホール Aichi Prefectural Art Theater Concert Hall	中部日本放送/名古屋市 後援: 外務省/文化庁/愛知県/ 愛知県教育委員会/ 名古屋市教育委員会/中日新聞社 《第16回名古屋国際音楽祭》	D
4月20日(火) 7時 Tue., April 20 at 7p.m.	大 阪 OSAKA	ザ・シンフォニーホール The Symphony Hall	梶本音楽事務所 後援: 朝日放送	B
4月22日(木) 7時 Thu., April 22 at 7p.m.	東 京 TOKYO	サントリーホール Suntory Hall	梶本音楽事務所	A
4月24日(土) 7時 Sat., April 24 at 7p.m.	東 京 TOKYO	サントリーホール Suntory Hall	梶本音楽事務所	B
4月26日(月) 7時 Mon., April 26 at 7p.m.	東 京 TOKYO	サントリーホール Suntory Hall	梶本音楽事務所	C
4月28日(水) 7時 Wed., April 28 at 7p.m.	東 京 TOKYO	東京芸術劇場 Tokyo Metropolitan Art Space	梶本音楽事務所	D
4月30日(金) 7時 Fri., April 30 at 7p.m.	東 京 TOKYO	東京芸術劇場 Tokyo Metropolitan Art Space	梶本音楽事務所	C

招聘・提供: 梶本音楽事務所

Presented by Kajimoto Concert Management Co., Ltd.

後 援: ドイツ連邦共和国大使館

The Munich Philharmonic Orchestra is brought to you by BMW and NEC.

セルジュ・チェリビダッケ

Sergiu Celibidache

セルジュ・チェリビダッケは、1912年7月11日にルーマニアで生まれた（当時ルーマニアで使われていたユリウス暦では1912年6月28日）。モルダヴィアのヤッシーという町で育った彼は、幼い頃からピアノのレッスンを受け、楽曲のハーモニーに関心を抱くようになっていた。ヤッシー、ブカレスト、パリで数年間数学、哲学、音楽を学んだ後、1936年にドイツへ移り、ハインツ・ティーターセンに作曲理論を師事した。2年後、ワルター・グマインドルのもとで指揮を学び始め、フリードリヒ・ヴィルヘルム大学でアーノルト・シェリングとゲオルク・シューネマンに音楽理論を、ニコライ・ハルトマンとエドゥアルト・シュブランガーに哲学原理を師事した。その後ジョスカン・デ・プレの音楽理論に関する論文の作成にかかったが、その頃、多くの国々で教育を受け、世界的視野を持っていた学生であったチェリビダッケを強くひきつけたのが、仏教と禅であった。彼の師であるマルティン・シュタインケは、思考の限界、つまり音楽において教えられることと教えられないことがあることを彼に示した。

第2次大戦直後の1945年夏、レオ・ボルヒャルトが急逝し、大学を出たばかりのチェリビダッケがベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者に迎えられた。彼は1952年までその任に当たったが、その間偉大なる音楽家ヴィルヘルム・フルトヴェングラーと出会ったことは、若きルーマニア人指揮者チェリビダッケに大きな影響を与えた。

ベルリン・フィルを離れてからのチェリビダッケは、お決まりの練習・演奏スケジュールをこなすことしかできないオーケストラを意識的に避け、彼の考えに従った充分なりハーサルを約束できるオーケストラだけを選んで指揮した。しかし、そのようなオーケストラでも、彼との密接な関係を築くことは難しかった。

1979年6月、チェリビダッケはミュンヘン・フィルハーモニー

管弦楽団の芸術監督、並びにバイエルン州の首都ミュンヘン市の音楽総監督に就任した。現在彼が指揮棒を振るオーケストラは、ミュンヘン・フィルのみである。唯一の例外として、ベルリン・フィルを指揮した2回の慈善コンサートがある。彼が最後にベルリン・フィルの指揮台に上ったのは1954年11月29日で、フルトヴェングラーの後任にヘルベルト・フォン・カラヤンが選ばれるという、チェリビダッケにとっては残念な決定が下された後のことであった。

チェリビダッケは、レコードやテープは音楽の個々の楽想を充分に表現しえないとの考えから、自らの演奏のレコード化、テープ化には非常に慎重な態度を貫いているが、近年になってごく僅かではあるが、ビデオ収録を認めている。これまでにアントン・ブルックナーの交響曲第4番、第7番、第8番、ヨハネス・ブラームスの2つのピアノ協奏曲（ピアノ：ダニエル・バレンボイム）、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番、ローベルト・シューマンの協奏曲イ短調がレコーディングされている。

チェリビダッケは、多くの名誉ある勲章や称号を授与されているが、中でもベルリン連邦首都の名誉教授とバイエルン州功勞勲章は、特記に値するものである。80歳を迎えた今年の誕生日には、ドイツ連邦共和国功勞勲章の功勞十字勲章を受けたほか、ミュンヘン市名誉市民の栄誉を与えられた。

チェリビダッケはサイ・バーバの信者であり、言語・書物・思考を通して現実を把握する考えを否定する新グノーシス派に属している。また、教育活動こそ人間の最も崇高な活動であるとの認識から、1978年からマインツ大学で音楽現象学を教えるなど、教育活動にも意欲的に取り組んでいる。



PHOTO : Werner Neumeister

ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団

Münchner Philharmoniker

ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団は、シュトゥットガルトのピアノ製造業者の子息である言語学者フランツ・カウム博士によって、1893年に設立された。すでに創設期からハンス・ヴィンダーシュタイン、ヘルマン・ツンペ、フェルディナンド・レーヴェなど著名な指揮者を招き、高い水準を維持すると同時に、当時の作曲家の作品を意欲的にとり上げた。フェリックス・ワインガルトナーが同オーケストラを率いていた時期（1898～1905）には、多くの国外ツアーを行い（アメリカ・ツアーも検討されていた）、国際的な名声を高めた。

グスタフ・マーラーは、自身の交響曲第4番と第8番の初演を、自らこのオーケストラを指揮して行った。マーラーの死から半年後の1911年11月、ブルーノ・ワルターが、当時コンサート協会管弦楽団と名乗っていた同オーケストラを指揮して、「大地の歌」を初演した。

1906年2月19日、当時20歳のヴィルヘルム・フルトヴェングラーがこのオーケストラを指揮して、デビューを果たした。これがこの両者の、以後数十年間に及ぶ密接な関係の始まりであった。

1908年から1914年まで、フェルディナンド・レーヴェが再びこのオーケストラの指揮者の任に就いた。1898年3月1日に、ウィーンでアントン・ブルックナーの第5交響曲を客演指揮して成功を収めていたレーヴェは、初めてブルックナー・チクルスを上演し、今日まで続いているミュンヘン・フィルのブルックナーの伝統の礎を築いた。

ジークムント・ハウゼンガーが指揮を務めていた1920年から1938

年までの18年間に、このオーケストラの名称は「ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団」となった。また、ブルックナーの交響曲の多くを初演したのもこの時期であった。

1938年から1944年夏までは、オスワルド・カバスタが首席指揮者を務めたが、今日でもなお彼の時代は、ミュンヘン・フィルの歴史の中でも、芸術的意義の上で最も輝かしい時代として記憶されている。その業績は、ベートーヴェン、ブルックナー、シューベルトの交響曲を取めたレコードから伺い知ることができる。

第2次大戦後の最初のコンサートは、1945年7月8日に行われた。それまでナチによって演奏が禁じられていたフェリックス・メンデルスゾーンの「真夏の夜の夢」序曲が、オイゲン・ヨッフムの指揮で、1曲目に演奏されたのだった。ハンス・ロスバウトという優れた指導者を得たミュンヘン・フィルは、彼が情熱をもって打ち込んでいた現代音楽のジャンルにも、レパートリーを広げて行った。ロスバウトの後を継いだフリッツ・レーガー（1949～1966在任）は、多くの著名な指揮者やソリストを客演に招いた。その中には、アンドレ・クリュイタンス、カルロ・マリア・ジュリーニ、ヨーゼフ・カイルベルト、エーリッヒ・クライバー、ハンス・クナッパブツブッシュ、クレメンス・クラウス、カール・シューリヒト、ゲオルク・ショルティ、ジョージ・セルなどがいた。

続いてルドルフ・ケンペが首席指揮者に就任し（1967～1976在任）、ミュンヘン・フィルは、初めて日本と旧ソ連へのツアーを行った。ベートーヴェンとブラームスの交響曲全集をレコーディングし、ブルックナー・チクルスの準備が進められた。しかしこの偉

大な指揮者のあまりにも早い突然の死によって、その後の計画はすべて無に帰することとなった。

1979年2月、セルジュ・チェリビダッケが初めてミュンヘン・フィルの指揮台に立ち、聴衆の大喝采を浴びた。この時から「チェリ」のコンサートは常に売り切れとなる状態が今日まで続いている。同年6月に、彼はミュンヘン市の音楽総監督となり、同時にミュンヘン・フィルの芸術監督に任命された。

1985年11月10日、ガスタイク文化センター内のコンサート・ホールがミュンヘン・フィルハーモニーに与えられた。1944年にそれまで本拠地として演奏してきたトーンハレが爆撃で倒壊して以来、実に40年ぶりに独自のホールを得たのだった。

新ホールでの最初のシーズンには、ギュンター・ピアラス、ジークフリート・マトゥス、ヴォルフガング・リーム、アルフレード・シュニトケらによる作品を初演し、世界中の注目を集めた。2年ごとに開催され、国際的にも高い関心を集めているミュンヘン音楽祭などで、現代音楽に真剣に取り組むミュンヘン・フィルの姿勢がうかがわれる。

ドイツ国内同様、国外でもチェリビダッケと「彼の」オーケストラは大きな成功を収め、旧東西ドイツ、フランス、イタリア、日本、カナダ、オーストリア、スペイン、アメリカ、ポーランド、スイス、旧チェコスロヴァキアなどにツアーを行っている。

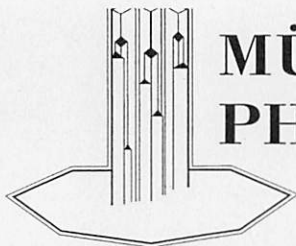
独裁政権崩壊直後のルーマニアの首都を訪れたり、そのすぐ後にブラハを、また東西統合直前の東ドイツを訪れるなど、ミュンヘン・フィルほど東欧と西欧の融和が図られて行く過程に深く関

わったオーケストラはないだろう。1991年10月には、ウクライナのキエフの人々を支援するミュンヘンの市民団体による救援活動の一環として、キエフを訪れた。これはルーマニア救援キャンペーンと同様の主旨による活動で、これによりミュンヘン・フィルは、東西の友好促進にさらに関わって行くことになった。

1988年10月、ミュンヘン・フィルはヘルムート・コール首相のモスクワ訪問に合わせて、クレムリンのピラー・ホールでコンサートを4回行った。これがきっかけとなり、以後しばしば音楽大使として、ドイツ連邦共和国政府や同大統領の要請により、その外国訪問に随行するようになった。イスラエル建国40周年のおりには、テルアビブ、エルサレム、ハイファにおいて、ドイツのオーケストラとして初めて演奏を披露した。

数週間にわたる北米ツアーの後、ドイツ連邦共和国建国40周年記念行事の中で、チェリビダッケの指揮で演奏した。また1991年には、ドイツ連邦大統領のローマ公式訪問に随行し、さらに国家使節としてセビリヤ国際見本市の開幕を飾った。

1992/93年シーズンも、音楽使節ミュンヘン・フィルハーモニーの活動は充実したものになっている。1992年秋には、現代の最も偉大なピアニスト、アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリをソリストに迎え、東アジアの国々へのツアーを行った。1993年10月13日は、ミュンヘン・フィルの創立100周年にあたり、楽員達は早くも、この記念すべき機会を聴衆と共に祝う日に、大きな期待を寄せている。



MÜNCHNER PHILHARMONIKER

1. Violinen

Werner Grobholz
Konzertmeister
Sreten Krstić
Konzertmeister
Lorentz Nasturica
Konzertmeister
Gratchia Arutiunyan
Konzertmeister
N.N.
stv. Konzertmeister
Karel Eberle
stv. Konzertmeister
Mathias Freund
Vorspieler
Hans Schuster
Max Fischer
Carla Moll
Manfred Hufnagel
Theresia Ritthaler
Katharina Krüger
Masako Shinohe
Claudia Ruf
Philip Middleman
Nenad Daleore
Peter Becher
Regina Matthes
Wolfram Lohschütz
Adriana Condriuc
Mitsuko Date-Botsch
Martin Manz

2. Violinen

Alexander Uszkurat
Stimmführer
Michael Simon Fordham
Stimmführer
N.N.
Stimmführer
N.N.
stv. Stimmführer
Julie Heßdörfer
Vorspielerin
Karlheinz Wetzl
Jürgen Gottmann
Ilona Weninger
Berthold Götschel
Dietmar Forster
Gustav Kolbe
Josef Thoma
Zen Hu-Gothoni
Anja Traub
Katharina Reichstaller
Sigrid Anton
Nils Schad
Matthias Löhlein
N.N.

Bratschen

Annemarie Binder
Konzertmeisterin
Helmut Nicolai
Konzertmeister
Martin-Albrecht Rohde
Konzertmeister
Deinhart Goritzki
stv. Solobratsche
Tivadar Popa
Vorspieler
Peter Chr. Steinkrauß
Gero Rumpp
Rafael Wojsyk
Hans-Dietrich Rave
Jorge Sutil
Max Spenger
Klaus Kosbahn
Herbert Stoiber
Wolfgang Stingl
Gunter Pretzel
Wolfgang Berg

Violoncelli

Heinrich Klug
Konzertmeister
Helmar Stiehler
Konzertmeister
Michael Hell
Konzertmeister
Stephan Haack
stv. Solocello
Thomas Ruge
Vorspieler
Hermann Dirr
Willi Schmid
Paul Holzfurtner
Erich Bruckner
Jörg Eggebrecht
Johannes Fink
Erhard Dimpfl
Herbert Heim
Veit Wenk-Wolff

Kontrabässe

Herbert Duft
Solo
Dorin Marc
Solo
Matthias Weber
Solo
Yoshinori Suzuki
stv. Solo
Stephan Graf
Vorspieler
Erwin Götz
Otto Bernhard
Franz Urbas
Franz Jörg Sirch
Wolfgang Nestle
Holger Herrmann

Flöten

Michael Martin Kofler
Solo
N.N.
Solo
Hans Billig
Piccoloflöte
Jürgen Borchers
Burkhard Jäckle

Oboen

Ulrich Becker
Solo
Michael Helmrath
Solo
Gerhard Hermann
stv. Solo
Bernhard Berwanger
Englischhorn
Susan Goetting

Klarinetten

Karlheinz Hahn
Solo
Martin Spangenberg
Solo
Wolfgang Schröder
Solo
Ralph Manno
stv. Solo
Peter Flähmig
Es-Klarinette
Wilhelm Mehls
Baßklarinette

Fagotte

Richard Popp
Solo
Friedrich Edelman
Solo
Josef Peters
stv. Solo
Jörg Urbach
Kontrafagott
Jürgen Popp

Hörner

Eric Terwilliger
Solo
Wolfgang Gaag
Solo
David Moltz
stv. Solo
Hartmut Hubert
Robert Ross
Alois Schlemmer
Hubert Pilstl
N.N.

Trompeten

Uwe Komischke
Solo
N.N.
Solo
Erich Rinner
stv. Solo
Hermann Göß
Franz Unterrainer

Posaunen

Dankwart Schmidt
Solo
Abbie Conant
Solo
Dany Bonvin
Solo
Robert Meißner
Bernhard Weiß

Tuba

Thomas Walsh

Pauken

Peter Sadlo
Solo
Stefan Gagelmann
Solo

Schlagzeug

Arnold Riedhammer
Walter Schwarz
Manfred Trauner
Edgar Guggeis

Harfe

Han-An Liu

Orchestervorstand

Deinhart Goritzki
David Moltz
Klaus Kosbahn
Wolfgang Stingl
Martin Spangenberg

**Direktion der
Münchner Philharmoniker****Geschäftsführender
Intendant**

Norbert Thomas

Persönliche Mitarbeiterin

Agnès Passemard

Künstlerischer Betrieb

Leitung:
Roswitha Wetz
Ulrike Wernst

Musikdramaturg

Dietmar Holland

**Presse- und
Öffentlichkeitsarbeit**

Leitung:
Karin Pittmann
Irene Keller

Notenarchiv

Matthias Wanko
Wolfgang Popper

Orchesterinspizient

Josef Huber
Martin Forthäuser
stv. Orchesterinspizient

Orchesterwarte

Egon Krammer
Eckart Kleinheisterkamp
Adolf Jännerwein
Anton Kufer
Horst Brunnhuber
Harald Laube
Nuray Fidan

Verwaltung

Leitung:
N.N.

Dieter Girstenbrei
Angelika Raidel
Michaela Boger
Karin Meier
Ursula Rauner
Jutta Unfried

**Karten- und
Abonnementbüro**

Sabine Lange
Bärbl Gauch
Eleonore Kuhlbars

A
プログラム

A. ブルックナー：交響曲 第3番 ニ短調（ノヴァーク版1889年）
Anton Bruckner：Symphonie Nr.3 d-moll
Fassung 1889 (Herausgeber Nowak)

- I. Mehr langsam, Misterioso
比較的遅く、ミステリオーソ
- II. Adagio, bewegt, quasi Andante
アダージョ、活発に、クワジ・アンダンテ
- III. Ziemlich schnell
かなり速く
- IV. Allegro
アレグロ

B
プログラム

A. ブルックナー：交響曲 第4番 変ホ長調「ロマンティック」（ハース原典版）
Anton Bruckner：Symphonie Nr.4 Es-Dur „Romantische“
Originalfassung (Herausgeber Robert Haas)

- I. Bewegt nicht zu schnell
活発に、速すぎずに
 - II. Andante quasi allegretto
アンダンテ・クワジ・アレグレット
 - III. Scherzo. Bewegt
スケルツォ。活発に
 - IV. Finale. Bewegt, doch nicht zu schnell
フィナーレ。活発に、しかし速すぎずに
- 

C

プログラム

F. シューベルト：交響曲 第7(8)番 ロ短調 D.759 「未完成」
Franz Schubert : Symphonie Nr.7(8) h-moll D.759 „Die Unvollendete“

I. Allegro moderato
アレグロ・モデラート

II. Andante con moto
アンダンテ・コン・モート

L.v. ベートーヴェン：交響曲 第6番 ヘ長調 作品68 「田園」
Ludwig van Beethoven : Symphonie Nr.6 F-Dur op.68 „Pastorale“

I. Allegro ma non troppo アレグロ・マ・ノン・トロッポ
Erwachen heiterer Empfindungen bei der
Ankunft auf dem Lande
田舎に着いたときの愉快的気分

II. Andante molto mosso アンダンテ・モルト・モッソ
Szene am Bach 小川のほとり

III. Allegro アレグロ
Lustiges Zusammensein der Landleute
田舎の人々の楽しい集い

IV. Allegro アレグロ
Gewitter, Sturm 雷と嵐

V. Allegretto アレグレット
Hirtengesang, frohe und dankbare Gefühle
nach dem Sturm
牧歌。嵐のあとの喜びと感謝

D

プログラム

J. ハイドン：交響曲 第92番 ト長調 「オックスフォード」
Joseph Haydn : Symphonie Nr.92 G-Dur „Oxford“

I. Adagio - Allegro spiritoso
アダージョ～アレグロ・スピリトoso

II. Adagio cantabile
アダージョ・カンタービレ

III. Menuetto, Allegretto
メヌエット アレグレット

IV. Presto
プレスト

P.I. チャイコフスキー：交響曲 第6番 ロ短調 op.74 「悲愴」
Peter I. Tschaikowsky : Symphonie Nr.6 h-moll op.74 „Pathétique“

I. Adagio - Allegro non troppo
アダージョ～アレグロ・ノン・トロッポ

II. Allegro con grazia
アレグロ・コン・グラツィア

III. Allegro molto vivace
アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ

IV. Adagio lamentoso
アダージョ・ラメントoso

プログラムA

ブルックナー

交響曲 第3番 ニ短調

ブルックナー（1824～1896）の交響曲全10曲は、ひと昔前に比べると比較的万遍なく取り上げられるようになってはきたけれども、それでもやはり、曲によってなお知名度にかなりの凹凸がある。この第3番は、たとえば人気随一の第4番には遠く及ばないにしても、これに先立って作曲された第0番～第2番の3曲が比較的聴く機会が少ないのに比較すると、ぐんと演奏の頻度が高い。言い換えれば、ブルックナーの音楽の本領が、この曲からいよいよ本格的に姿を現し始めるのである。

ところで、ブルックナーが大のワグネルアンだったことは周知の通りである。彼はたった11歳年上でしかない巨匠を、さながら神のように敬愛した。第3交響曲はほかならぬそのワグナーに捧げられた作品で、次のようなエピソードが知られている。

1873年の9月、ブルックナーは、折しも「祝祭劇場」の建設をめぐる多忙を極めるワグナーをバイロイトに訪ね、首尾よく憧れの人に会見するチャンスを掴んだ（平身低頭の姿勢で巨匠と握手を交わす有名な影絵が残っている）。その際、彼は第2交響曲と、折しも作曲中の第3交響曲の草稿を持参し、そのどちらかを献呈させていただきたいと、お伺いをたてたのである。ワグナーが選んだのは第3番の方だった。ところが、よほど緊張していたのか、ビールの酔いがいつになく回ってしまったブルックナーは、翌日になってみるともう、どちらの曲だったのかよく思い出せない。仕方なく彼は、改めてワグナーの意向を確認しなければならなかった、というのである。ともあれ、曲は翌74年に完成し、うやうやしく巨匠に捧げられる。ちなみにその第1稿は、随所にワグナーの楽劇からの引用が含まれていた。

第1稿はしかし、ウィーン・フィルに演奏を拒否されたため、ブルックナーは大幅な改訂を断行する。その折り、ワグナーからの引用

の多くが削られ、1877年12月16日にその第2稿で、曲はようやく初演の運びとなった。ところが、予定された指揮者が急死して急速ブルックナー自身が指揮棒を握ったこともあってか、結果は惨めな失敗に終わった模様である。

それからさらに10年あまり、もう晩年近くなってから、曲は再び書き改められた。今回もまたきわめて大がかりな改訂で、第1稿と比べると小節数にして実に400あまりの減少という計算になる。こうして見違えるようにスリムな第3稿ができた。今回使用されるのは、その1889年の改訂版に基づく「ノヴァーク版III./3」である。なお、第3稿による初演は1890年12月21日、やはりウィーンで行われた。曲は以下の4楽章構成。

第1楽章 比較的遅く、ミステリオーソ

ノヴァーク版III./3で651小節。その物理的な巨大さもあることながら、ブルックナーならではのえも言われぬスケールを感じさせる音楽になっている。なお開始部には明らかにベートーヴェンの第9交響曲（同じニ短調である）を意識した跡がある。

第2楽章 アダージョ、活発に、クワジ・アンダンテ

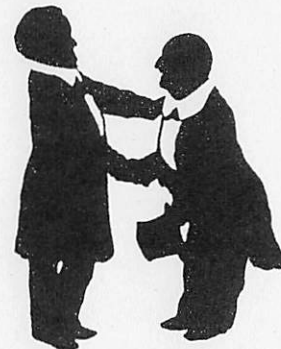
ロマンティックで清々しい主題に始まる3部形式の音楽で、中間部はアンダンテ・クワジ・アレグレット。

第3楽章 かなり速く

素朴な舞曲調のトリオ（中間部）を持つスケルツォ。

第4楽章 アレグロ

最後の改訂の際に最も大きく改変された楽章で、特に極度に切り詰められた再現部に関しては異議を唱える向きも少なくない。チェリビダッケがどう聴かせるか、楽しみなところ。



オットー・ペラーの影絵

プログラムB

ブルックナー

交響曲 第4番 変ホ長調「ロマンティック」

ブルックナーの交響曲の中でも早くから広く愛好され、現在でもなお、おそらく最も演奏される機会の多いのがこの第4番変ホ長調だろう。それはもちろん音楽そのものの魅力の賜であるわけだが、こと知名度に関して言えば、たまたま曲にタイトルが付いていることが大きく物を言っているかも知れない。《ロマンティック(ロマンティッシェ)》とは単なる愛称ではなく、ブルックナー本人による命名である。さらに彼は、たとえば「中世の夜明け……云々」(第1楽章)とか「暗い森」(第2楽章)などという具体的な言葉を持ち出して彼のイメージを示唆したこともあったようだが、それはさておき、この「ロマンティック」という標題が、どこかドイツの深い森を思わせる曲の独特の雰囲気符合して、聴き手に強くアピールし続けてきたことは明らかである。

この交響曲もブルックナーの作品の通例として、いったん書かれたあと、いく度も改訂が施された。第1稿の完成は1874年、50歳の年であるが、翌年のウィーン・フィルによる試演で「第1楽章以外は演奏するに値せず」という手ひどい批評を浴びせられたため、彼は大幅な改作に着手する。まず1878年にスケルツォを新たに作曲したほか、第1、2、4楽章にも手を入れた(第2稿)。続いて翌年には終楽章も新しいものに取り替え(第3稿)、翌1880年にはさらにその第4楽章に手を加えた(第4稿)のである。そしてブルックナーは、第1～3楽章の「第2稿」と終楽章の「第4稿」とを合わせて「決定稿」としたのである。1881年にウィーン・フィル(ハンス・リヒター指揮)が行なった初演はその「決定稿」によるもので、まず申し分のない成功を収めたと言われる。

第4交響曲はしかし、その後もなお回り道をする。それは、ブルックナーの弟子に当たる指揮者フェルディナント・レーヴェが中心になってまたしても改訂が進められたためで、それは1888年に初演されて大

好評を得、翌年の初出版以来、その形で世に広まっていったのである。レーヴェの改訂はむしろ善意から発したものには違いない。しかし「決定稿」との間にはかなりの異同があり、それは必ずしもブルックナーの意向に添うものではなかったようである。作曲者の本意を尊重した版が登場するのは彼の死後遠く、20世紀ももうかなり年を経たからのことで、ブルックナーの「決定稿」に基づくハースのいわゆる「原典版」が、1936年に出版されたのであった。今回使用されるのはそのハース原典版である。

第1楽章 活発に、速すぎずに

ブルックナーの交響曲の第1楽章のいつものやり方で、3つの主題によるソナタ形式になっている。第1主題は弦のトレモロの上にホルンが奏でるもの(ブルックナー開始)。金管群による力強い第2主題は特徴的な3連音符のリズムを持ち、一方ヴィオラに出る第3主題は鳥のさえずりを連想させる。

第2楽章 アンダンテ・クワジ・アレグレット

弱音を付けた弦をバックにチェロが歌い始める。暗い気分が覆われた音楽だが、コーダでは主題が力強く蘇り、そのあとに静かな余韻を残して終る。

第3楽章 スケルツォ 活発に

ブルックナー愛用の3連音符のリズムを駆使した通称「狩のスケルツォ」。「速すぎずに、決してだらだらしないように」と記されたレントラ・舞曲風のトリオ(中間部)をはさむ3部形式だが、長大な主部はそれ自体やや穏やかな中間部分を持つため、さながらスケルツォが4回繰り返されるかのようにも聞こえる。

第4楽章 活発に、しかし速すぎずに

生命力溢れる輝かしくも長大なフィナーレ。第1楽章と第3楽章の主題が再登場し、最後は第1楽章のテーマが高らかに奏でられて全曲が結ばれる。



聖フローリアン修道院



ブルックナーの墓。遺言どおり聖フローリアン付属教会のオルガンの下に葬られた。

プログラムC

シューベルト

交響曲 第7(8)番 ロ短調 D.759 《未完成》

この交響曲はシューベルト（1797～1828）25歳の1822年秋に着手され、遅くとも1824年春には第2楽章までが完成された。しかし、夭折のシューベルトもその時点ではなお4年余りの持ち時間を残していたにもかかわらず、曲は結局、完成されなかった。なぜか？ それについてはさまざまな憶測がある。そして決定的な結論に結びつく手掛かりはない。

シューベルトが完成を断念したのは、思うに、あまりにも美しい2つの楽章のあと、さすがの彼も、それに続くべき音楽をもう持ち得なかったという理由に尽きるのではないだろうか。途中でやる気をなくしてしまったのでも、また作曲を中断しているうちに忘れてしまったのでももとよりなく、形だけ仕上げて不本意な結果を残すよりは、むしろ未完成のままひっそり忘れ去られる方を、彼は望んだのではなかったろうか。

ともあれ、この交響曲は文字通り比類ない美しさを誇るとともに、2つの楽章だけでもそれなりの完結感を備えていることから、シューベルトの死後37年を経た1865年の初演以来こんにちまで、れっきとした一人前の交響曲として——従来は「第8番」として、最近の国際シューベルト協会編作品目録改訂版などでは新たに「第7番」として——扱われ、広く人々に愛されてきた。作曲者本人にしてみれば、形の上では途中で投げ出してしまったこの曲が、150年あまりのち世界中のオーケストラに引っぱり風になろうとは、思ってもみなかったに違いない。交響曲の新しい道を切り拓いた画期的な作品として特別の評価を受けることも……。曲は低弦から印象的に始まる第1楽章アレグロ・モデラートで、いずれ劣らぬ2つの美しい主題がコントラストの妙をみせたあと、第2楽章アンダンテ・コン・モートが、これも至上の音楽の花園に聴き手を誘う。

ベートーヴェン

交響曲 第6番 ヘ長調 作品68 《田園》

ベートーヴェン（1770～1827）は彼の第5ならびに第6交響曲の作曲を、少なくとも一時期は、並行して進めた。そしておそらく、第5番の完成に続いて、この《田園》の仕上げに取りかかったとみられる。筆が進められたのは主として、かつて例の「遺書」がしたためられたウィーン郊外ハイリゲンシュタットの、のどかで美しい自然の中でであった。

第5番で徹底して人間の内面を深く凝視したベートーヴェンは、《田園交響曲》では一転、自然という外的な対象に目を向けた。つまりこの曲は、第5交響曲とはまったく対照的な性格を持つ音楽であるわけだが、しかし単に第5番のアンチテーゼとしてのみ生まれたのではない。根本的にはやはり、自然に対する深い愛が、この曲の根元にあるだろう。そもそもベートーヴェンは、美しい自然の中に身を置くことに無上の喜びを見出した人で、ことに耳疾が悪化するにつれて人付き合いがおっくうになってゆくと、その傾向はいっそう強まっていった。そしていま、彼を取り囲むハイリゲンシュタットの美しい田舎に、これまでにまして愛着を覚える自分を発見したとき、ベートーヴェンはその切実な思いが、交響曲というシリアスな音楽に十分見合う重みを持つものと感じたのではなかったろうか。

曲は5つの楽章から成り、第3～第5楽章は続けて演奏するようになっている。ベートーヴェンは《田園》というタイトルのほか、各楽章に「」内のような標題を掲げた。①アレグロ・マ・ノン・トロポ「田舎に着いたときの愉快な気分」 ②アンダンテ・モルト・モッソ「小川のほとり」 ③アレグロ「田舎の人々の楽しい集い」 ④アレグロ「雷と嵐」 ⑤アレグレット「牧歌。嵐のあとの喜びと感謝」

プログラムD

ハイドン

交響曲 第92番 ト長調 《オックスフォード》

ハイドン（1732～1809）の膨大な交響曲創作のハイライトは、言うまでもなくいわゆる「ロンドン交響曲」のシリーズ（第93番～第104番）である。しかし当然のことながら、彼はその比類ない境地を、一朝一夕に手にしたわけではない。「ロンドン交響曲」がハイドンの究めた頂上とするなら、それまでの90曲ほどの交響曲は、いわば一步一步、その高みに向かって登ってゆく、長い長い登山道のようなものだ。そしてその道すがらにも、頂上のお花畑を予告するような、美しい花々が咲き誇っている。ましてや、この第92番ト長調ともなれば「ロンドン交響曲」へのアプローチの文字通り最後の一步、胸突き八丁も過ぎて、もう頂上がすぐそここのところまで彼は登り詰めていた。

この曲は一般に《オックスフォード》の通称で呼ばれるので、一見イギリス訪問の折りの産物のように思われるがそうではない。そもそもは、フランスのドゥオニ伯爵からの依頼で、ロンドン楽旅に先立ち、おそらく1789年に作曲されたものとみられる。それから数年、ハイドンがオックスフォード大学から名誉博士号を贈られることになった際——言うまでもなく、第1回イギリス楽旅の輝かしい成果に対する贈与——その返礼として当地で行った一連の演奏会の最終日に、ハイドンはこの旧作を演奏したのである。それがイギリスでのこの交響曲の初演であったことから、《オックスフォード》の呼称が広まったのだろう。ともあれ、形式の整頓、楽想の豊かさ、なにかんづく技法の充実において、ハイドンの交響曲を代表する1曲であることは間違いない。

曲は4楽章構成で、アダージョの導入部とアレグロ・スピリトosoの主部から成る第1楽章は、とりわけ展開部での対位法が見事。次いで暗く劇的な中間部を持つアダージョの緩徐楽章、さらに、素朴な音調のトリオを挟んで主部が繰り返されるアレグレットのメヌエットを経て、 prest の潑刺とした終曲で締めくくられる。

チャイコフスキー

交響曲 第6番 ロ短調 op.74 《悲愴》

あんなにも美しく、親しみやすい音楽の数々を書いた作曲家でありながら、チャイコフスキー（1840～1893）はかなり屈折した人生を生き、そして死んだ人のような。53歳での急死は、一般に一杯の生水を飲んだ不注意から当時流行中のコレラに罹ったため、とされるが、それは作り話である可能性がある。彼の死は、一部で噂されたようにやはり自殺だったのではないだろうか。しかもそれは、同性愛の性癖を糾弾されたあげく、自分で自分の始末をつけるよう、つまり自ら命を絶つことを勧告されたのだというショッキングな説が、比較的最近現れて話題になった。もっとも、それを真っ向から否定する新説もあって、真相はなお藪の中である。

交響曲第6番《悲愴》は1893年、まさにその最晩年の作。チャイコフスキー自身の指揮による初演がペテルブルクで行われたのは10月28日である。上述の悲劇が仮に本当なら、彼はすでに破局の目前にいた。すなわち「勧告」があったのが10月31日、その2日後、明らかに砒素中毒とみられる症状で、もう重体に陥っていたというのだから……。そして11月6日に最期の時がくる。とは言えむろん、この曲とチャイコフスキーの死との間に直接の因果関係があるのかどうかはわからない。しかしいずれにせよ、これが彼の人生の悲しみと絶望とを深く託した、およそ救いのない深刻な音楽であることは確かである。

曲は苦渋に満ちたアダージョの導入部とアレグロ・ノン・トロppoの主部から成る第1楽章に始まる。一転して第2楽章アレグロ・コン・グラツィアは優美な曲調だが、5/4拍子の独特のリズムが、一抹の悲哀を感じさせずにはいない。そして荒々しい行進曲を中心楽想とする第3楽章アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェのあと、いよいよアダージョ・ラメントsoの終曲に入る。これは文字通り慟哭の調べで、最後は絶望の淵に沈み込むように終わる。



PHOTO : Werner Neumeister

チェリビダッケを 「聴く」ことの難しさ

片桐 卓也

最近の夕刊の文化面は精彩を欠いているが、先日偶然手にした讀賣新聞の夕刊（93年1月21日付）には、見逃せないエッセイが掲載されていた。それは作曲家・細川俊夫氏によるもので、「聴くことの難しさ」についていくつかの問題提起がなされていた。

たとえば、「現代日本のように音楽が商業主義の餌食となった」国では「新しい未知の世界を見せる音楽」は「『聴きづらい音楽』として周縁へ追いやられてしまう」。「西洋音楽の聴き方をも、私たちの国では曲解してしまう。クラシック音楽を神聖化したり、逆におしゃれでトレンディなものにすり替えていく音楽業界の人には、モーツァルトやベートーヴェンの音楽の本当の力は見えていないだろう。ベートーヴェンの使う三和音は、その時代ではだれもが聴いたことも想像したこともない衝撃的な三和音であった」。(以上、「」内は細川氏の原稿からの引用)。

本当は全文引用したいが、残念ながらスペースがない。読みたい方は縮刷版などで、ぜひ読んでいただきたいと思う。どちらかと言えば、クラシック音楽をトレンディなものにすり替えている業界人のひとりとして、僕には耳の痛い言葉ばかりだったが。

細川氏のエッセイは、とかく安易に現状に縛られてしまう「聴く習慣」をもう一度見直し、常に「新しく聴くこと」へ向けて、我々が主体的に関わることを提案している。そのエッセイを読んで以来、その提案とこれまでのチェリビダッケを聴いた経験とが、うまく結び合うところを探してみたいと考えているのだが。

ともかく、日本にいてこんなにチェリビダッケの指揮した音楽を耳にすることが出来るようになるなんて、70年代後半を貧乏学生で過ごした僕たちにとっては、夢のようなことなのだというをまずわかって頂きたい。

チェリビダッケの名前はまず映像のなかで見たという記憶がある。「フルトヴェングラーと巨匠たち」というタイトルで現在はLDとなって

いるフィルムの上映を、たしか銀座ヤマハホールあたりで見た。そのフィルムのなかで、ひととき力感のある指揮ぶりをみせている若い指揮者がチェリビダッケだった。ちょっと長めのタクトを叩き付けるように振っていて、引き締まった顔にはまだ青年の面影が残っていた。緊張感と力強さに満ちた「エグモント序曲」は、現在のチェリビダッケの音楽の印象とは対極にある。

その後、77、78年と2度にわたり読響に客演したことで、チェリビダッケは“幻”ではなくなった。80年にはロンドン交響楽団（LSO）と来日。この間にはミケランジェリとベートーヴェンの「皇帝」をライブ録音したレコード（オケはバリ管）も発売されたはずである。ミュンヘン・フィルとの来日は86、90、92年と続き、今度で4回目。91年にはたまたま幸運にもバリ（オペラ・バステューユ）で、僕はこのコンビを聴くことが出来た。

なかでも一番印象に残っているのが80年のLSOとの演奏会。ラヴェルの「マ・メール・ロワ」での、素晴らしく精緻で立体的な演奏と、ブラームスの交響曲第1番での、収まりが良すぎてどこか不完全燃焼な印象を与えた演奏との落差が、今では奇妙な懐かしさといりまじって思い出される。

最近の演奏会では、バリで聴いたドビュッシーの「海」の、まったく速度感を欠いた、うねりさえない、どっしりとした存在感だけのあの演奏と、昨年の日本での、超スローといっていいいチャイコフスキイの第5番の演奏が印象的だった。

一言で言ってしまうと、チェリビダッケの指揮による音楽は、すべて“らしくない”のだ。つまり、こちらがそれまでの体験で知っているその楽曲の印象とは、まるで別の音楽が響いているようだ。それはある人にはとておもしろいを与え、ある人にとっては反感を誘い、ある人には熱狂をもたらす。

しかし、チェリビダッケはそういう即時的な反応にすら気をはらっていないようだ。彼は語る——「作品とは存在するものではなく、演



PHOTO: Werner Neumeister

奏するたびに生まれるものだ」（NHK・BSで放送されたドキュメンタリー「なかでの発言」）。ひとつの空間のなかで、音楽は生まれては消え、生まれては消え、生成と消滅を繰り返す。まるで極彩色の砂絵曼陀羅を描いた後で、すべてを掻き消してしまい、その見事な極彩色の印象すらつまらないものだ、とでも言っているようだ。特に最近チェリビダッケがよく演奏するブルックナーの交響曲の場合、それを強く感じる。それは、日本の多くのブルックナー・ファン（男性が圧倒的に多いらしいが）の耳には、どう響いているのだろうか。らしく響いているのだろうか？

言葉の国・日本では“幻”や“最後の巨匠”などといったレッテルが、どうしても必要のようだが、そろそろそういうレッテルなしに音楽に向き合えないものだろうか。チェリビダッケの指揮による音楽は、そういう言語支配からはとうに抜け出している。いたずらに彼を神格化することなく、彼の音楽に耳を傾けること。そのときに、改めて「聴くこと」の難しさがわかるかもしれない。

それにしても、チェリビダッケはいつこのような考え方に到達したのだろうか。少なくとも「エグモント」を指揮する映像からは想像がつかない。ルーマニア生まれで、バリとベルリンで学んで、禪に帰依しているという、もともと彼が持っていたコスモポリタン性のためなのか。判断材料が少ないのが残念だ。

そして、オペラの序曲は振るのに、オペラ自体は振らなかったり、マーラーをほとんど振らなかったりする謎（？）が、まだ残されている。実を言えば、今一番聴きたいのは、チェリビダッケ指揮によるオペラなのだが、仕方がない、それは夢のなかで聴くことにしよう。

「心」と「音楽」の 完全なる一体

沼尻 竜典（指揮者）

私は、最初の留学先、ドイツのフライブルクの大聖堂で、初めて信者のコーラスを聴いた時の感激を、今でも良く覚えています。それは決して上手な合唱とは言えないものでしたが、身震いを感じる程心を動かされてしまいました。

その数ヶ月後、開館したばかりのバリの新オペラ座で、チェリビダッケ＝ミュンヘン・フィルによる演奏会を聴いたのですが、その時の感動は、私がフライブルクのコーラスから受けたそれと同じ質のように思えました。

「心」と「音楽」の完全な一体化。一音一音に込められた「祈り」。もちろん技術的にはミュンヘン・フィルと信者のコーラスでは比較になりませんが、両者に共通しているものは多いのではないかと思います。

ですから私は、チェリビダッケ氏の演奏会に行く時は、これから厳粛な儀式か何かに参列する、という気分になってしまいます。たとえ、そこで演奏されるのが、ロッシーニのコミカルな作品であっても。

彼は世の中からは変わり者と見られているようです。例えばレコーディングをほとんどしないという事について。でもそれは、前述のような見方からすれば至極当然で、これは私なりの解釈ですが、演奏行為が祈りそのものであるとすれば、毎朝のお祈りやお経が面倒だといってテープに取って流す事ができないのと同じく、演奏も一回ごとのものだという事なのでしょう。また、こんなエピソードがあります。私のベルリン芸大の指揮科の先輩が、チェリビダッケ氏のコンサートの後、楽屋を訪ねてサインをねだりました。そうすると氏は「サインはしないが、話ならする」と言ったそうです。ちょっと聞くと、やっぱり彼は変わり者だ、で済まされてしまう話ですが、彼のようなスーパースターが、どこの誰かもわからぬ一人の若者（スコアを差し出したので音楽学生だという事は見破っていたでしょうが）のために、演奏後で疲れているにもかかわらず、時間を割こうとした、その事に私は感動しました。今後の音楽界のために若手を育てて行くという姿勢

は、音楽を愛する気持ちの深さ故のものではないでしょうか。

チェリビダッケ氏がミュンヘン・フィルの若手奏者を指揮台の上から見つめる目には、愛情が溢れていて、同じ若手としては少し嫉妬を感じてしまいます。彼の所には、若手指揮者が大勢集まって来ますが、ミュンヘン・フィルは原則として、全てのチェリビダッケ氏とのリハーサルを公開して、それに応えています。その中から、現在立派に活躍している指揮者も多数出ています。また、リハーサルには音楽学生でなくても、音楽を愛好する市民はだれでも入場できます。ベルリン・フィルが、音楽学生にさえ門を閉ざしているのとは対照的です。このような所にも、氏の音楽への愛情、人間の大きさといったものが現われていると思います。

私も時々、ベルリンからミュンヘンまで出かけて行って、リハーサルの見学をさせてもらいますが、初めて見た時は本当にびっくりしました。私がそれまで日本やベルリンで見えてきたリハーサルは、とにかく効率第一。指揮者はなるべくしゃべらず、少しの事には目をつぶり、時間が残っていてもオーケストラを喜ばせるため、一分でも早く終わらせる、といったものでした。かなり有名な偉い指揮者でも、そのやり方は大して違いません。しかし、チェリビダッケ氏はたった一つの音の出し方を延々と（時には20分以上）述べた後、「それではやってみましょう」と音を出させ、「いや、そうじゃないんだ」とまた延々……。楽団員もそれを少しも嫌がらず、氏の要求に応えようと必死です。チェリビダッケ＝ミュンヘン・フィルの演奏の凄さは、このように、一つ一つの音をどう出すか、という事を全員が納得している所にあると思います。始めに私が述べた、信者のコーラスと共通する、「心」と「音楽」の一体化、「祈り」といったものは、この緻密なりハーサルから生まれてくるのでしょう。その「祈り」が演奏会という場で完全に成就した時のエネルギーは、時として作品の偉大さを超えてしまいます。もう、そこで演奏されているのは、ハイドンでもベートーヴェンでもブルックナーでも良いのです。作品も演奏者も、天からの、ある



PHOTO: K. Miura

いは宇宙からのメッセージを伝えるための媒体となる……。そのような時、聴き手としても澄み切った純粋な心で、そのメッセージが受けとめられなくてはいけないと思います。「やっぱりテンポが遅かったなー」「あの表現ちょっと変わってるねー」程度では、せっかくのチェリビダッケ＝ミュンヘン・フィル体験も無駄というもの。チェリビダッケ氏は、オーケストラだけでなく、我々聴き手にも試練を与えてくれるようです。

どうか皆さんのいらした今日の演奏が、そのような素晴らしいものとなります様に。それは皆さんの力にもかかっています。ただ、その体験の後「チェリビダッケ中毒」になられても、現在のところ治療法は確立されておられませんので、御注意の程を。

沼尻竜典(ぬまじりりゅうすけ)●1964年東京生れ。桐朋学園で指揮と作曲とピアノを学んだ後、1989年ベルリン芸術大学に留学。1990年ブザンソン国際指揮者コンクール優勝。同年10月、トゥールーズ国立管弦楽団、また1991年1月には「若い芽のコンサート」でNHK交響楽団を指揮して、ヨーロッパおよび日本でデビュー。以来、国内の主なオーケストラはもとより、ヨーロッパのオーケストラにも出演を重ねている日本のホープ。1991年出光音楽賞受賞。1993年4月新星日本交響楽団正指揮者に就任。ベルリン在住。

チェリビダッケ・ ミュンヘン・フィルと テレビの思い出

天野 晶吉 (NHK・音楽FM番組
チーフ・ディレクター)



ミュンヘン・フィル初来日公演のポスター

巨匠チェリビダッケは、レコード録音を断固として拒否し続けて来た指揮者として有名であり、そこには彼独自の音楽観が示されているのはもちろんのこと、レコード資本の支配力の強い音楽界にあって、この点では他の指揮者とは大きく一線を画して来た芸術家である。

しかし、テレビの映像作品については寛容な態度を見せており、昨年4月1日のベルリン・フィルを37年ぶりに指揮したときの映像とか、私たちNHKが、1990年の日本公演のときにサントリーホールで行ったブルックナーの交響曲第7番と第8番のハイビジョン収録などは、やはり貴重な映像資料として後世に残るものになるのではないかとと思われる。私は幸運にも、そのとき交響曲第8番の映像ディレクターを担当し、貴重な体験をすることができたので、ここでは、その思い出を少しご紹介したい。

ただその前に、私としては、チェリビダッケの活動のパートナーとなっているミュンヘン・フィルについて、NHKとこのオーケストラとの長い付き合いのなかで、今や日本の音楽界では完全に忘れ去られたと言ってもよいことから、まず述べさせていただきたい。

それは、1972年のミュンヘン・フィル初来日のことである。これは、ミュンヘン・札幌オリンピックの関連行事として、NHKが招へいたもので、冬(2月)にミュンヘン・フィルが札幌に来て、秋にはN響がミュンヘンを訪れて、いずれもオリンピック芸術展示としてコンサートを開くという、日独オーケストラの交換計画として実施されたもので、当時としては、なかなか意義のあるプロジェクトだったのである。

私は、このときNHKの担当者の一人として、ミュンヘン・フィルの札幌を初めとする日本公演に同行したので、いろいろ個人的にはなつかしい思い出があるのだが、正直なところ、この1972年のミュンヘン・フィル初来日は、日本の音楽ファンには、あまり強い印象を残してはいないのである。

当時の常任指揮者は有名なケンペであったが、彼は病気がちで日本までの旅行には耐えられず、代わりにチェコの名指揮者ヴァーツラフ・

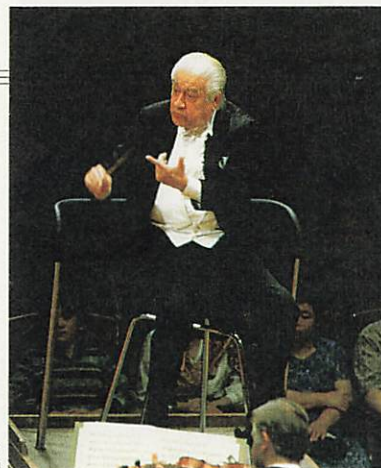
ノイマンが来るはずであった。しかし彼も、ミュンヘンで練習をすませて、いよいよ日本へ出発しようとして、いったんチェコへ帰ったところ、どういう理由か直前になって出国を差し止められ、結局、かつて1950年代に常任指揮者であったフリッツ・リーガーが、急遽日本公演を指揮したのである。指揮者が代役の代役というわけだったこともあり、このときのミュンヘン・フィルを記憶しておられる方は少ないようである。

しかし、身近かに接した私にとっては、やはり何と言っても、南ドイツ最大の音楽都市ミュンヘンの市立オーケストラであり、その昔、マーラーが「千人の交響曲」を自ら指揮して初演し、マーラーの死後にはブルーノ・ワルターが「大地の歌」を初演したオーケストラであり、今世紀の両大戦間には、プフィッツナー、ハウゼン、カバスタなどの指揮の下に「ブルックナー・オーケストラ」とうたわれただけに、それなりの伝統の香りと実力をそなえていたように思われた。

第1バイオリンと第2バイオリンが、指揮者を中央にして下手と上手に対称的に並ぶという古いオーケストラの配置を、当時も守っており、同行した老大家ハンス・リヒター・ハーザーのいかにも古めかしいピアノもよくマッチして、古きよき質実剛健なドイツを感じさせるオーケストラであった。

NHKの招へいだから、もちろん東京や札幌での公演はテレビでも放映されたのであるが、当時のビデオはすべて消去されており、残念ながら、この時のミュンヘン・フィルの演奏は、今では私たち関係者の思い出の中に残っているだけなのである。

1976年にケンペが亡くなってから、新しい常任指揮者が見つかるまで、このオーケストラは低迷の時代に入るのだが、もし秀れた指揮者が常任になれば、きっとすばらしいオーケストラになるにちがいないと、私は思い続けていた。その後の歴史は、正にその通りになったわけで、1979年にチェリビダッケが芸術監督に就任してからは、すでに日本の音楽ファンにもよく知られている通りで、若い優秀なメンバー



1990年10月サントリーホールにて。
PHOTO: K. Miura

を数多く採用し、また他では見られない非常に時間をかけた独自の練習方法で、めきめきと腕を上げ、今ではベルリン・フィルと肩を並べるドイツ有数のオーケストラとなったのである。

このミュンヘン・フィルとチェリビダッケの組合せで初めての日本公演が実現したのは1986年のことであるが、私は、NHKとこのオーケストラとの1972年以後のつきあいもあり、ぜひテレビ収録はできないものかと、いろいろ努力してみたが、チェリビダッケの時代になって放送権料も高くなっており、この時はあきらめざるを得なかった。

その次の来日は1990年であったが、この時は、いわゆるメディア・ミックスで、NHKだけではなく、NHKエンタープライズと「ソニー・クラシカル」と三者による共同制作ということと、主催者の梶本音楽事務所の好意的な協力もあって、ついに時代の先端をゆくハイビジョンによる収録が可能となったのである。1972年の初来日のときからミュンヘン・フィルとつきあっていた私にとっては、正に長年見つづけていた夢がようやく実現したという思いであった。

そのとき我々が事前に得ていた情報では、チェリビダッケとミュンヘン・フィルは、ウィーンのムジークフェラインザールで、すでにブルックナーの交響曲第4番を録画したのだが、このカメラ・ワークがマエストロの気に入らず、いまだに発売の許可を与えていないということであった。

このカメラ・ワークを担当したのは、オーストリアにおける我々の同僚ともいえる人で、私たちもよく知っているカベルカ氏であった。

彼はオーストリア放送協会（ORF）の職員でありながら、かつて盛んにカラヤンのビデオを制作していた西ドイツのテレビ制作会社「ユニテル」の仕事も、何度かやったことがある人だけに、カラヤン制作のオーケストラ映像に影響されすぎたのか、カラヤン流のやり方で、オーケストラのメンバーは殆んど顔が映らず、専ら楽器のアップのみという画面構成であった。実はこれは、チェリビダグケ氏の最もいやがることだったのである。マエストロは、同じ誤りを日本で繰り返したくないと思われたのか、私たちに事前に会いたいと言われて、こうしてチェリビダグケ氏のテレビ映像についての考えを、直接ご本人から聞くという、またとない機会をもつことができたのである。

マエストロはまず、「オーケストラのメンバーは、必ず顔まで映っていること。フルートやオーボエなどの楽器のアップのみというメカニックな映像は、絶対に許せない。指揮者とメンバーとの人間的、音楽的なコンタクト、そして対話がいかに大切かということが、映像でもはっきり表現されなければならない」と強調された。何かにつけて、カラヤンとは正反対のマエストロらしい意見であったが、私たちとしては全く異論のないところであり、全面的に賛成した。（この点については、正直に言って、NHKのオーケストラの映像にも、カラヤン流の指揮者以外のメンバーは楽器のアップばかりという悪い影響が見られた時期があったが、それは一時的な現象であって、すでに克服されたと、私は思っている。）。

次にマエストロは、ブルックナーに多いクレッシェンドをどう表現するかについても、「クレッシェンドは常にズーム・インといった安易な考えはやめて欲しい。クレッシェンドを映像でどう表現するかについては、細心の注意を払って欲しい」と強調された。

この二点のみを注意してくれば、あとはNHKの実績と経験を尊重し、自由にやってくれていいということで、極めてなごやかな会見となった。

最後に、「これまでマエストロは、レコードの録音は一切許可してお

られないのに、なぜ映像作品の制作は認めておられるのですか」と率直に聞いてみたら、マエストロは、にやりと笑って、「これは音楽ファンへの私のサービスだよ。私の音楽は生で聞かなければ、決して体験できないという考えは、少しも変わっていない」ということであった。

一度でもチェリビダグケとミュンヘン・フィルの生演奏を聞いた人ならば、その音量のダイナミック・レンジの広さ、またオーケストラの音色の多彩さは、いかに技術が進歩しても、そしてまた音声技術者の方々には申しわけないことながら、技術的に再現できるものではないことは、自明のことである。これは、一度でも生演奏を聞かれた方は、すぐ理解されるはずである。だから「映像」は、チェリビダグケの芸術に代わりうるものでないことはもちろんで、ただ「音楽ファンへのサービス」だと言うわけである。これらの映像作品を通じて、生でぜひ聞いてみたいという音楽ファンがふえることを望んでおられるのであろうし、また一つのドキュメンタリーとして残しておいてもいい、という考え方に到達されたものと思われる。

また、交響曲第7番については、放送や販売に際しては、聖フローリアンのブルックナーが眠る修道院教会の映像から曲に入るようにと要求された。これは、ブルックナーに対するマエストロの尊敬の念が、いかに深いかをうかがわせるものであり、同時に映像についてのマエストロの関心が、なかなか深いものであることを感じさせた。

その後、全世界的な不況や音楽界をめぐるきびしい経済的事情から、巨匠チェリビダグケとミュンヘン・フィルの映像化は、ますます実現しにくくなっていると思われるだけに、この1990年のハイビジョン収録は、本当に貴重な機会だったのではないかという思いを、ますます深くしているのである。

1990年10月の日本公演におけるチェリビダグケ／ミュンヘン・フィルのブルックナー交響曲第7番及び第8番は、「ソニー クラシカル」からレーザー・ディスクとして発売中。

～ソニークラシカルより、好評発売中～



LaserDisc

チェリビダッケ/ブルックナー

セルジュ・チェリビダッケ(指揮)/ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団



ブルックナー：交響曲第8番ハ短調

1990年10月、サントリーホール（ライヴ収録）

HDVS（ハイ・ディフィニション）映像収録
〈カラー/ステレオ/デジタル録音/約104分〉

● LD：SRLM 1054～5（CLV3面）

税込 ¥9,200（税抜 ¥8,932）

好評発売中



ブルックナー：交響曲第7番

1990年10月、サントリーホール（ライヴ収録）

HDVS（ハイ・ディフィニション）映像収録
〈カラー/ステレオ/デジタル録音/約83分〉

● LD：SRLM 998（CLV2面）

税込 ¥6,300（税抜 ¥6,116）

好評発売中

ブルックナー：交響曲第6番

1991年11月、ミュンヘン

HDVS（ハイ・ディフィニション）映像収録
〈カラー/ステレオ/デジタル録音/約71分〉

● LD：SRLM 1056（CLV2面）

税込 ¥6,300（税抜 ¥6,116）

4月21日発売



MUSIC IS
OUR VISION

Sony Records
Sony Music Entertainment (Japan) Inc.

練習と本番と—— 音楽が育まれる情景 (今年2月のミュンヘン・フィル)

許 光 俊

冬の寒さが凍った土からコンクリートの舗装を通して、あるいは洒落たタイルを通して、つまさを冷やし、脚からだんだんと身体を頭まで上がってくるような、そういうドイツの2月の朝——土曜日である。商店街を除けば、街はしんと静まりかえっている——ミュンヘンのガスタイク文化センターの裏手にある、ほとんど人通りがないうら寂しい灰色の道に面した楽屋口は、毛皮やウールの厚いコートに身を包み、首にはマフラーを巻きつけ、頭にはこれまた毛皮や皮革製のあたたかい帽子を載せた人たちでごったがえしていた。

楽器を抱えた人たちはもちろんオーケストラのメンバーなのだろう、あるいは若すぎる顔は音楽学校の学生なのだろう、入口の門衛に挨拶して次々とドアをくぐっていく。けれども、それ以外は普通の市民といった態の人々が多い。相当の老齢と見える夫婦から、母親に手を引かれた子供まで、男女を問わず大勢が、やはり門衛にひとことふたこと言っ、建物の中に吸い込まれていく。その門衛は私の顔を見ると、何も問う間もなく、電子ロックの開錠ボタンを押した。こんな時間に大急ぎで来る外国人がいたら、目的はひとつに決まっている。

時間がないから、「どうも！」という感じで中に滑り込むと、目の前にある大きくて重い、鼠色の鉄扉を開いた。狭い階段がある。これを上がるとちょっと広くなった通路になっていて、そこを抜けるともうホールだ。明るい色の木材が張り合わされている舞台では私服の楽員たちが各々の楽器を握りしめている。ここはとても暖かいから、彼らはどんだん服を脱いでいって、色とりどりのシャツ姿になっている。床の上には楽器のケースが無造作に置かれ、椅子の背中では女性奏者のハンドバックが揺れている。その前の客席にはすでに数百人の人々がどっかと腰を下ろしている。1階席はぎっしりと埋まっているし、それどころか2階席もいいところ一杯だ。

ミュンヘン・フィルでは原則として総練習（ゲネプロ）を無料で公開している。たいていは初日の朝に開かれるこの練習を楽しみにして毎回通う人は少なくない。もちろん、練習を見るのは本番とは違った

おもしろさがあるからだ、それだけが理由ではない。今、このオーケストラには一万四千人を越える定期会員がいて、定期演奏会の席はほとんど彼らで満杯になっている。会員になるのはなかなかたいへんで、数年待つのを余儀なくされる。それゆえ、一般前売に出るチケットが非常に少ないのも当然、わずか二百枚にも満たない。プログラムがベートーヴェン、ブラームス、ブルックナーなどという人気があるものだとたちまち売り切れになってしまい、諦められない人たちがいきおいゲネプロに集まることになる。この日はブルックナーの交響曲第5番だったから、切符は、もちろんのこと、とうになくなっていった。

チェリビダッケは左手から出てきた。大事をおもんばかったのか、付き添いが手を貸している。けれども、表情は明るく、たいそうな数の人が集まった客席に向かって、「ようこそ、皆さん。早いのにごくろうさまです」とでもいったふうに鷹揚に手を振る。客席がのんびりとした拍手で応える。いかにも我らが地元のオーケストラといったくつろいだ雰囲気漂う。

チェリビダッケはようやくのこと指揮台に上がると、ゆっくりと椅子に腰かけ、念入りに姿勢を整えてから、オーケストラに向きなおった。簡単な挨拶の後、一般的の注意を与える。このゲネプロは2時間の予定だし、曲は長い。だから万事がてきばきとスムーズに運ばなければならないが、この指揮者とオーケストラにとってブルックナーの5番はすでにお得意のレパートリーだから、決して不可能なことではない。観客たちはとくに静かになっていて、舞台の上に注目している。指揮者の腕はすぐに振り上げられて、練習が始まった。

まずは第4楽章から通していく。長大で複雑なこのフィナーレから片付けていくのだ。始めてから間もなく、オーケストラを止める。チェリビダッケには弦楽器の細かい音型と管楽器の和音の重なり合いが気に入らない。叱りとばしたり、事務的に注意するのではなく、ぶつぶつだらだらと文句を言う。嫌味といえは嫌味にも見える。だが、それはおそらく彼独特の毒のあるユーモアを含んでいたのだろう（残念

ながら、その内容がよく聞こえるほどに私の席は近くなかった)、楽員がゲラゲラと笑い出す。それがまた何ともリラックスした長い長い笑いで、あの全体に極限の緊張がみなぎるチェリビダッケとミュンヘン・フィルのブルックナーとは見事に対照的なものだった。管楽器だけ、弦楽器だけで別々に弾かせてみてから、もう一度やりなおすと、確かに響きははるかに整然となり、指揮者は今度は先に先にと音楽を進めて行った。

その後、第2、1、3楽章という順番で（途中で15分の休息をはさんで）全曲をひととおり流した。オーケストラを止めて細かく指示する箇所は少なく、たいていは続けながら、棒で、あるいは言葉で直していく。スケルツォでは、主部の最後が思ったようにうまく決まらないうでいると、コンサートマスターが立ち上がり、「ここは私がこういうふうになりやすく弾こう」と提案し、皆の前で大きな身振りでやって見せる。そうして、彼ひとりが立ったまま、全員がもう一度同じ箇所を繰り返すと、今度はビタリと合って、問題はあっさりと解決した。何しろ、これから昼御飯を食べてひと休みしたら、もう夜の演奏会で、再びこの長大な交響曲を繰り返さなければならないから、今の練習でオーケストラを疲れさせてしまうわけにはいかないし、また80歳を越えた老齢の指揮者が自分の健康を常にコントロールしなければいけないのも自明だ。スケルツォの中間部まで済ませると、あとはリビートになるから、練習終了が宣言された。楽員たちは弓で譜面台をバタバタと叩いた後、てんでに散って行った。客席からも拍手が起きると、チェリビダッケは、登場の時と同じく鷹揚に手を振りながら舞台袖に姿を消した。他に誰もいなかった舞台の上では、それでもクラリネット、オーボエ、フルートといった奏者たちが自主的に残って、互いのアンサンブルを練り直していた。

＊

晩の本番は、それはそれは見事なものだった。オーケストラは練習時とは桁違いに集中力を発揮した。弦楽器は、特にチェロ、コントラ

バスの低音楽器を軸に、透明でありながら立派な量感を確保し、その上にこれも同様に重厚でかつ全体が溶け合った金管楽器の大群が整然と乗ってくる。先ほど居残って練習していた木管楽器たちは、ブルックナーの音楽特有のソロイスティックな個所、木管だけの絡みの個所を非常な注意と自発性でもって演奏する——多数の金管や弦に一步も引くまいという張り詰めた神経が周囲に伝播して、ホルン、ティンパニといった面々が普段以上に気を入れた独奏を聞かせ始める。個々人が夢中になっていると同時に、総体としてがっしりと組み合う。

これが合奏の精髓であり、オーケストラという集団の奏でる音楽のもっとも充実した瞬間と言すべきもののなのだ。ある瞬間、ある場所で起きる、人間の心理の動き。目の前で、百人の集団が見るまに集中度を高めていって、ついにはおもしろいほどにアンサンブルが決まり出す。一貫する雄大な流れが自ずと生まれてくる。空間や時間が不思議にもキッと緊張していくのがわかる。

終楽章——丹念に、明瞭に、精密に描き分けられたフーガを通過した後、最後に眩いばかりの崇高と栄光に達したときのオーケストラの響きはちょっと信じられないようなものだったが、それはチェリビグッケが昨年の秋に来日したとき、一にも二にも〈自発性〉ということ強調していたことを思い出させた。この指揮者が1970年代にシュトゥットガルト放送響を振っていた時分、録音で聞く限り、音楽は途方もない精密さへの意志をむき出しにしていたし、指揮者は自分が実現したい音楽に向けて楽員を叱咤激励している様子だった。ところが、今、チェリビグッケはオーケストラをごく自然に自分の望む方向にもって行き、一方、楽団のほうも自らの行きたい方向に指揮者に連れて行ってもらっているように見える。指揮者とオーケストラが相手を通して自分を実現しているのだ。

今年の1月末から2月半ばにかけての1ヶ月に満たない間に、チェリビグッケとミュンヘン・フィルの演奏会は3プログラム、10回に渡った。「田園」、ワーグナー、ブルックナー……それは老齢の指揮者に

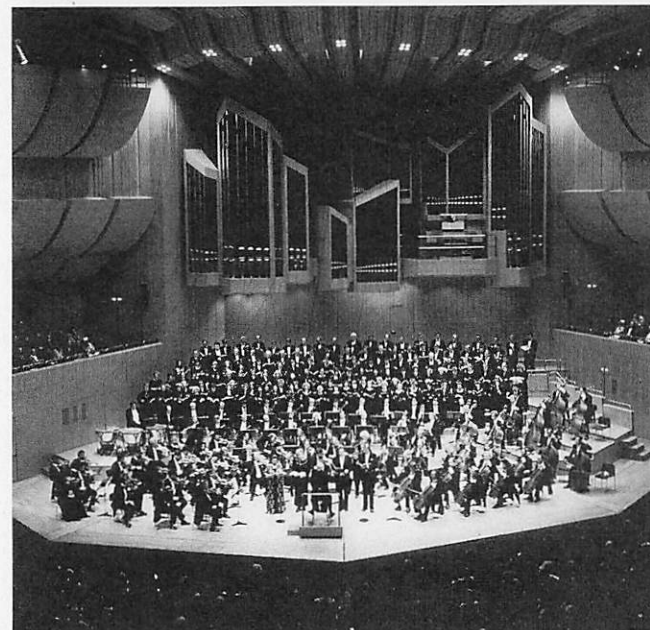


PHOTO: Werner Neumeister

とっても、細心の注意力を要求される楽団にとっても楽なものであるはずがないにもかかわらず、各プログラムすべてが、この指揮者とオーケストラの特別の関係にふさわしく、豊かな黄金色の実りの時期を迎えた深い美と内省を達成していたのだった。各々の曲について、部分について、特徴や美しさを数え上げていくつもりなら、できる。けれども、それはあまりにも聴き応えがありすぎるくらいの今回の日本公演を目前にしては、意味がないだろう。指揮者とオーケストラが奏する音楽の最上の伝統がまだここでは生命を保っている、とだけ言えば十分である。

ウィーンに伝承された香り豊かな極上のアンサンブル

ウィーン八重奏団

●5/16日2時 東京 東京文化会館

シュベールト:ピアノ五重奏曲「ます」

(ピアノ:神谷郁代)

シュベールト:八重奏曲 ヘ長調 D.803

入場料: S ¥7,000 A ¥6,000 B ¥5,000 C ¥3,000

【全国日程】 5/11(金)奈良 5/13(木)福岡 5/14(金)大阪

5/15(土)東京 5/20(木)盛岡

5/21(金)・5/22(土)・5/23(日)東京



名匠率いるロンドン5大オーケストラの一翼。

ロンドン・BBC交響楽団 アンドリュース・デイヴィス指揮

●5/24(月)7時 東京 東京芸術劇場

ベルク:ヴァイオリン協奏曲 (Vn:竹澤恭子)

マーラー:交響曲 第5番

●5/25(火)7時 東京 サントリーホール

キース・ギフォード:暁の寺院

—武満 徹に捧げる(世界初演)

ラフマニノフ:ピアノ協奏曲 第2番 (Pf:小山実稚恵)

ブラームス:交響曲 第2番

●5/28(金)7時 東京 昭和女子大学人見記念講堂

ベートーヴェン:交響曲 第5番「運命」

ベルリオーズ:幻想交響曲

入場料: S ¥14,000 A ¥11,000 B ¥9,000 C ¥7,000 D ¥5,000

協賛: KOMATSU

【全国日程】 5/13(木)奈良 5/14(金)山口 5/15(土)奈良 5/16(日)大阪
5/18(火)長崎 5/19(水)熊本 5/20(木)鹿児島 5/21(金)大宮
5/22(土)つくば 5/26(木)盛岡 5/27(金)秋田

落ちついた音色と味わい—

最もドイツらしいオーケストラとマエストロが聴かせるドイツ音楽の神髄／

バンベルク交響楽団 ホルスト・シュタイン指揮

●5/21(金)7時 東京 サントリーホール

R.シュトラウス:交響詩「ドン・ファン」

R.シュトラウス:交響詩

「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」

ベートーヴェン:交響曲 第7番

●5/22(土)7時 東京 サントリーホール

シューマン:ピアノ協奏曲 op.54

(ピアノ:マルタ・アルゲリッチ)

ブルックナー:交響曲 第4番「ロマンティック」

入場料:
(5/21) S ¥14,000 A ¥11,000 B ¥9,000 C ¥7,000 D ¥5,000
(5/22) S ¥19,000 A ¥16,000 B ¥13,000 C ¥10,000 D ¥7,000

招聘: アーツ・インターナショナル



熱情と哀感—スケールの大きいピアノ・デュオの魅力が存分に披露する。

マルタ・アルゲリッチ & アレクサンドル・ラビノヴィチ ピアノ・デュオ

●5/23(日)7時 東京 Bunkamura

オーチャードホール

メシアン:アーメンの幻影

ブラームス:ハイドンの主題による変奏曲

ラフマニノフ:組曲 第1番「幻想的絵画」

●5/24(月)7時 東京 Bunkamura

オーチャードホール

ラフマニノフ:交響的舞曲

ラビノヴィチ:ポピュラー・ミュージック

モーツァルト:2台のピアノのためのソナタ K.448

モーツァルト:アンダンテと5つの変奏曲 K.501

ラヴェル:ラ・ヴァルス



入場料:
S ¥12,000 A ¥10,000 B ¥8,000 C ¥6,000
【全国日程】 5/16(日)熊本 5/17(月)倉敷
5/19(水)前橋 5/20(木)藤沢

キャスリーン・バートル ソプラノ・リサイタル

ピアノ:サンドラ・リヴァース

●6/10(木)7時 大阪 ザ・シンフォニーホール

主催:読売テレビ/読売新聞大阪本社

●6/13(日)7時 東京 サントリーホール 5/15(土)発売

バーセル:歌劇「インドの女王」より 恋の病から逃れ去

ろうと/シューマン:悲しさに歌わないで、私のばら、松雪

草、眠りの精、ことば、時は春/R.シュトラウス:セレナー

ド、夜、私はただよう、子守歌、二人の秘密をなぜ隠す

のか/ビゼー:四月の歌、てんと虫、古い歌、アラビアの

女主人の別れ/アンドレ・プレヴィン:「蜜とヘンルーダ」より

入場料: (大阪) S ¥15,000 A ¥13,000 B ¥11,000 C ¥8,000 D (ステージ後方席) ¥7,000

(東京) S ¥15,000 A ¥12,000 B ¥9,000 C ¥6,000

【全国日程】 6/4(金)松本 6/7(日)多摩 6/16(木)広島 6/18(土)岡山



クレームルも激賞するホープ、ファン・クーレンとオランダの新星ブラウティガムの期待のデュオ。

イザベル・ファン・クーレン (ヴァイオリン) ロナルド・ブラウティガム (ピアノ) デュオ・リサイタル

●6/23(水)7時 東京 津田ホール

フォーレ:ヴァイオリン・ソナタ 第1番 op.13

サティ:左右に見えるもの—眼鏡なしで

ドビュッシー:ヴァイオリン・ソナタ

ブーラン:ヴァイオリン・ソナタ「F.G.ロルカの追憶に」

●6/25(金)7時 東京 津田ホール

ヤナーチェク:ヴァイオリン・ソナタ

ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ「クロイツェル」

ベルト:フラトレス

R.シュトラウス:ヴァイオリン・ソナタ op.18

入場料: ¥6,000 (全指定席) 協賛: ヘネシー・コニャック

【全国日程】 6/17(木)・6/18(金)N響定期(ファン・クーレン) 6/20(日)伊勢原

6/22(火)札響定期(ファン・クーレン) 6/24(木)東京



●お目にはよっては売り切れのお慮もごさいます。詳しくはお問い合わせ下さい。
●曲目は変更になる場合がございます。あらかじめご了承願います。

お問い合わせ・お申し込みは 梶本音楽事務所

 KAJIMOTO CONCERT MANAGEMENT CO., LTD.